小栗外傳三編

伍

へ13
3293
17北

門 へ13 3293 巻 17

寒燈夜話 小栗外傳 巻之十五

第九六編

東都 絳山戲編

怨家を討得て孝義を表を
佛堂を再建して因縁全し

此時結城持朝再びヤヽほゝ。事既ようくおさまり何をうぬぼれたるぶ某が
諫を聽ず。弗のごとく必ず腑を噛の患あらんと述々ほゝ持氏も長嘆そと言ひ
けるが。我不明ゆゑて注秀が諫を信じ。今日おさまりて注をゞ召し汝が諫を拒ざ
るぶ絡どもも。危急の時ぶ望んで注秀が如き半。此身の分疏をなさんとせば手ぶ
彼と共ますことを云ばとどさとぶ命ぶ惜きのゆく。罪を郎黨ぶ負ーそ和を
こふつの聽病さよと世の人口ぶかゝらんと甚ぶ惜き事ぶらざるや。斯のごとく有ん
ぬ。こゝろの和睦奇ぶ故のごとく。鎌倉の意頃を做ふとても。みる我を慢り。命ぶ

渚侯おくほど生うぐくく恥さんよう。死て勇豪の名沈残さんを豈際ようくゝ
やくびやと采くく氣をよいおうりきう。持朝呵くこうち笑ひ。この物よ狂ひのみや。
爾うまされこれ匹夫の上うりいそで大将の名ずたることう。今此生害あるうらべ。
不明不知とも人さやさん聖賢の君やて漫臣のみや。弊財不正のものありしも。
甚非を知りそ佞臣を罪し。明君の名を全や。万民徳や伏を和漢ふその例勘
かいば君今詮秀を罪し。先非を改めりうんや誰う命を恥きゃこん基氏二此
地よ基業をたのふ。幾許の勤労とろもぼしあをそ。それを一人の佞臣のみる。彼る
菜嶺のおとく捨ののうんと。不孝とやいそん不明とやいうん小事をりて大事を
得りのひそと言語をそして流やーべ。打氏公漸やふ駐うひくやつまで
過くりくく汝宜く斗らひ将と以淀めるやそ持朝再び甲斐る某が言然駐
さまふい幾許の賜りのを好るよりも。遥場りて忝なーと。ふく感謝。それよを

俄よ郎常ふ命じ一色詮秀とぬぶよ忽ち罷りまりて詮秀仏北へ落如
のひくん陣中一人の人影をこんぶこと報るふ打氏公もこまとーめーいみく
詮秀が佞悪を憤りのふ持朝かさここをくめと不審まぶ。おのれがる勢
をび鎌倉ふ残して。打氏公を守護うさしをる対八僅よ数十人の従者をおそ赤軍
の屯をる武蔵國府中ふ赴れ小栗が陳ふ踵こ駈と案内さこの毒附小栗
助重を家枚持房とやもよ憲実公を救んと上州白井ふ到るところ種急勢ハ
京軍の殺ひ事にるふくめおづし一色詮秀同財家をこーめ。治る海を押て
引退られ。案ふ相違し。憲実ふ対面ーこれより三ま一所よなうて一色を
討るーこ武蔵国まぐおー生ろれよ。一色と毒くも鎌倉ふ迎去ることや毛侭ふ
鎌倉ふ押ものとおりしうど。家枚も小栗も詮秀をこを討めと思へさうとが
漏会ごのを襲んと忍びうふ睹ーく漏会人くそち入らべ同國府中ふ

陳取て居る処ゟ只今結城ゟ胡小栗が陳ゟ参りたれば急ぎ
陣中ゟ清じ入對面を乞ふ一別後恙なきやと互ゟ一別後恙なきやと互ゟ
此回の一乱鎌倉方のおほ一方ならぬ一色淦秀が手ごゝの忠行。
そも〳〵家扶憲実を誅をはよ発れり。ちかごろ近日。淦秀が手ごゝの忠行。
一旦ゟ露顕一君ふかく憤ほり給ひや他方へ
被落失ね淦倉どの足を攻めのひれ刃の不明を恥く生害ゟ
某ごとき君をやつのみのふだ。今淦倉殿失
ゟ〳〵ゟ誅とぐめすゆびしうりこれ君
ゟぐ本国忽ち乱ゟ京都も危ふく天下の患ひとならん。
淦倉の中ゟ和睦あらんことを頻ゟめ。ゟゟ足下この陣ゟ居ながら京
すみやかにこれを識んとも不知足下が意奈何と問べ。小栗去んぬる
ゟゟよ。よくも心を用ひるめぞ某ゟ淦倉の世臣ゟゟ昔ゟ近習ゟ

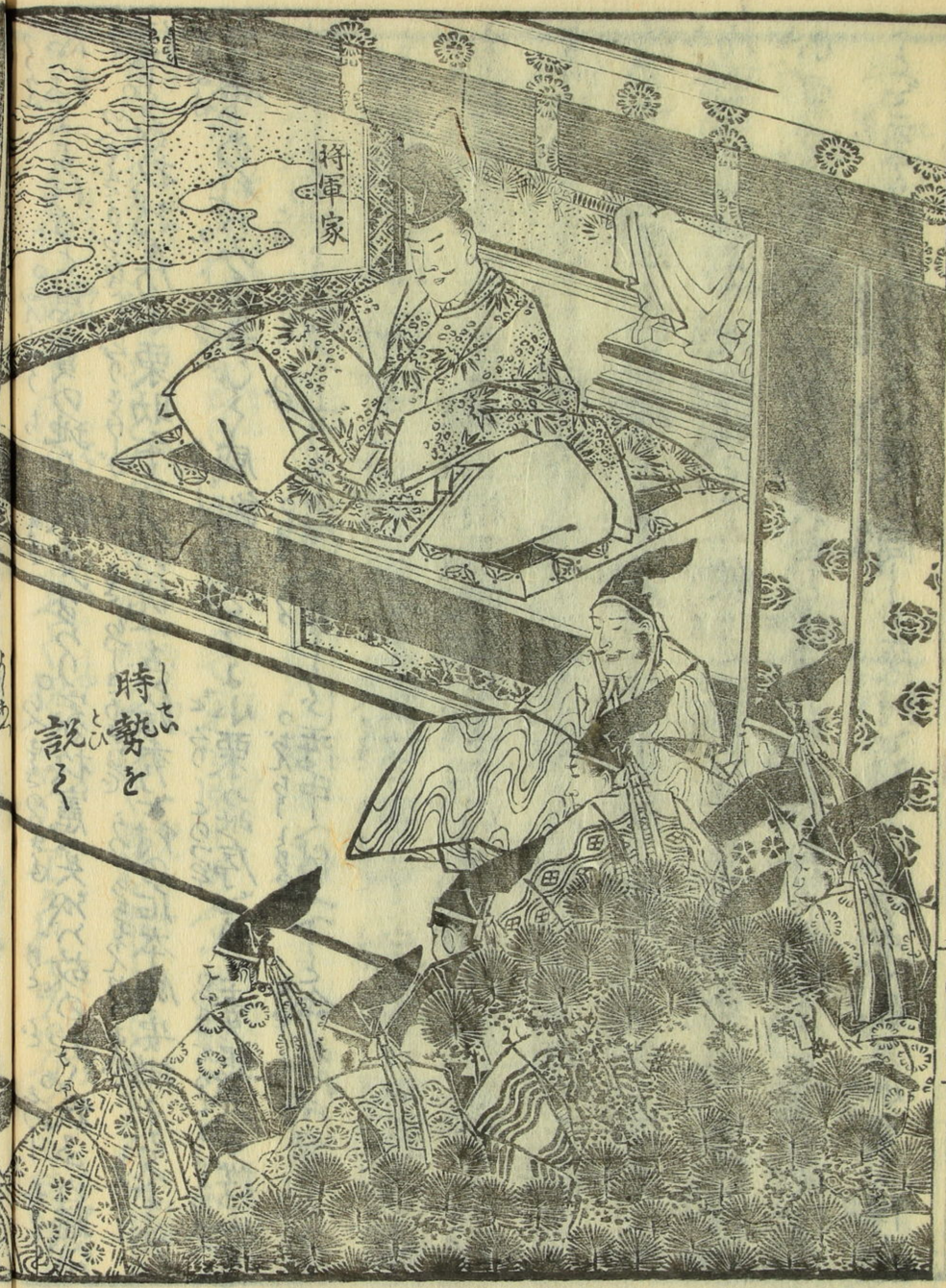
仕り深く恩を蒙れり。一旦淦倉者のゟゟを受れどいかゞ旧好を
忘るべき既ゟ今ゟ軍家の命にゟて鎌倉へ押寄ゟぞ刃のかく踈て
ゟゟ淦倉殿よりこれ忍がくそくがく。ゟゟ某ゟこれ
高ゟ然れどもみる淦倉殿のゟ勘当を蒙りしりのうまぐ。ゟゟ
あぐんおよゟなくゟゟしゟ足下のこゟゟふそ峠一。我くが想ゟのごと
ゟゟ氏ゟよゟ上ゟべ一両家扶よゟ浅ゟそゟゟ和睦再んとゟと頼母ゟ
ゟこゟゟ持胡うぎりなく喜びて忠義の志を感ずりその后助ゟこゟゟ
ゟゟ某千辛万苦ゟて軍家のゟゟを攻ゟ今回討ゟゟ父の仇
一色を討ゟんゟゟゟゟ去向知ゟごとゟ某ゟ去ゟを精量あれとゟ某ゟこ
ゟれば。お刻遅ゟさそゟゟ患ひのひそ足下さぞゟて某ゟゟん。
去年某女児を怪獣ゟそゟれを足下が郎党の仁我力を以て足を切ゟり。

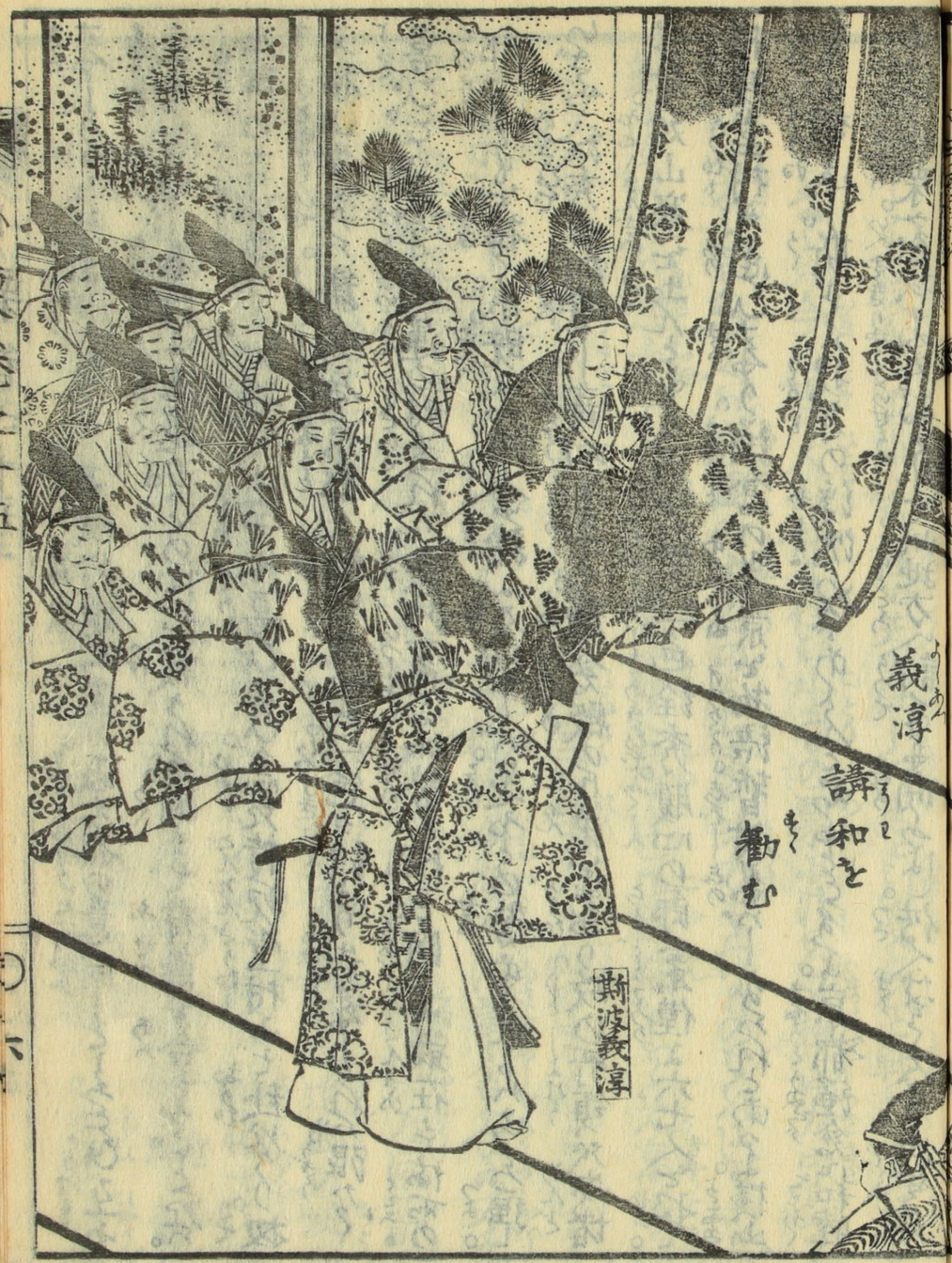
其時その労を報ひんとて一色を討とりて報へよと仰ければ
ものと平日ごろ約ふことを主じ。ものゝ
一色の弁よくく心を知ざることあれば心服のそのゝ
終に入其勅静を窺ひ京軍の勢ひ日ゝ盛んなり。鎌倉方日毎ゟ
微くしくなほ紙ゝ武蔵國の陣を逃去程覚堂村の賊桜山安秀が許ゟ
の労を報んと。足下仇討をせんとはゝと思ひそやあれば。
小栗大きゝ喜び好きのほど感佩を。郎党池庄司をしめ人ゝごと沢胥
一般よ出ん。前言空ゝねを感謝せり斯く小栗が妻家枝ゟ舎し打明の
ゟへ入ることを物語ふこゝ弄んで頃営ましらざらば和睦速ゟ調へよ
ゝと妻家枝小栗の人く打明よ仕上漁父ゟ路り持氏ゟこゝまでとそ

打氏公ハ不明ゆゝて人ゝを退ゟ寄りて悪魄の人ゝも忠誠の主ぞれを
畏むぞ原来これ仁君忠臣の徒ゟ互ゟ心解く。君臣ゟ交壺の金ぞ
なゝふゟ。それより不日ゟ家枝持房京邸ゟ出。将軍家ゟこゝ
ゟ鎌倉ゟの今回のつの蔑く心意ゟ
牧事ゝゝんことおりひ家枝憲実ゟ綸ぞゟおよれり爾ゟふ京軍の勢ひ
強く漁倉方衛ゝふ微しくなりしほど斯ゝの禍ゟ及んと弥ゟ出奔し
日比志ゟを通ゟ。相州の賊桜山とゝふりの方ゟ有ゟようゝほし漁父
ゟを知ゟめ今更注秀ゟ駭ゟぬゟ
とあるを結城打朝これを止めすゝひ其ゟ等ゟ陳ゟ事ゟて先非を悔ゟあはしを
はゞえの某が父禅秀の亡びしも注秀が逸言ゟゝて漁父ゟの注ゟ
ゟ半ゟあゝねゟか得て知りぬ結城が云を

三人相談しお氏名の内を取るに尚ほ心底を取るに持胡ゆゑに注秀
とゐふ候者の為み正しき心も掩ひ隠されさせまじ癖ことをせにしまみ妻ひ臣。
足をとの君今逼迫み在まさるべきと東國忽ち乱をそれより世ハ合戦の街
とうくん就くハれ和睦のつく故のごく水奥の内中と成まう。天下の大乗
何ごこれよ志うんと守へまもるをれが斯波左ゑ侍従義淳ハ側よ仕ひそほが。
家枚拍房がやゑ進を生くやほハ甚郷よやせんハ只今拍房がやえ上
処へ速ふれ許容あまじと諫やせば。拍軍家も実ゆりとおぼし則ちハ和睦
あるべれハ出をお房お賜りそれが大よ喜び感佩よ堪ざとも書を袖ゆくらいそぎ
漏参よやりお氏公よ告まうくをれば。これ是を見しのふ甚寂寥なほハ和睦の
書をれが喜びおぼをこと大ごまうふ西よ向ひく恩を謝し。人くもとれ於示し
まうよこころおもひ斜ふよ万策を唱くく祝ごうかくをまるまふ及ぶも持胡が

忠誠よりと恩賞の地を数々のりり。家枚憲実ハ故のく。犯まの職お
ゑ復し。家枚拍房小栗助重ハ父の仇と絵秀をけの后本願安堵さとべきこと
旨命あれば。みる喜びく感謝せりこと
けさくく。此よりゑメへ上ろふ何ろ苦しく家枚拍房よ相談し小栗ハ追手
金綱。永享二年九月中旬相州逸倉をうく同國太住の府お着ふり足
より横山が居をトし。控現堂村へ三里よりくね道なれども昨日より陥そば
降りて路次悪りしよ猶々晩よ及べハ仮もも便り悪しと太住よ陳えしも。
初更のころより天色晴そう。皎くさる月のさやけさハ白昼のごとし行ふ。
小栗ハ今宵敵の不意を討ばやと。後夜兵ハ助高をして拍房が陣ふ夜討の
ことを云やりしふ拍房も小栗と同しく夜討をかけんとさまでも便ハ小栗が陣ふ


將軍家
時勢を説く


義淳
講和を勧む
斯波義淳

きさまるゝまで。途中あやまちあらば大切の意同一ならんこと。互ふ
主命を通じ各陣よき出張りこのよしを報ずれば。斯まで府節を合ずごとく。
出陣の吉兆なりと大将も士卒も喜びあひ急ぎ指現堂村へ赴けり扨
又横山安秀乃ハ鎌倉の屋敷より京都へ報きのふは一色が許より告来れば浪なく
喜び。こハ我牙間運の附至れり急ぎ一色よ加勢を乞と國ゝへ散在せる族の
部下どもを招くふ。既よ一千余騎よ及びぬ。又其外の勢かゝるべきもの
いざや註秀よ加勢ー。奇功をたてゝ鎌倉殿の恩賞を得ん。
せんと。治山塞を出んとする所へ忽ち一色註秀が腹心の郎党僅よ六七人を
擯現堂村へ忍びまり。鎌倉の光景を物語皆附忍びーのこれとあるよ横山
案よ相違ー斯ゝハ我牙の浮沈いざめくんと思ふよ京都逸会川和睦
ありて小栗家枝を討よ向ふよし。依人ゆゝ大きよ驚き。

今ハ逃るとも脱まじ此上ハ運を天よ任ーすまと川受とれと戦ひ。うち勝も
まとはやどるべふ今の世の人ム此よ住むハ小栗の栗ゐ行ん又稗ゐ付べふ。
彼方此方とさまよふ。法國の大名のうちの味方をたのみ。
然るとてハ註秀乃ふり。鎌倉殿の恩ゐ報ずとて京都へ傾
ふゝんやをや切只我ゐめぐいふる大国を領せんも心のまゝ。ことごとくふり
手勢ホをゝの部下の悪徒のうちゝやも称津今夜又浅草舎名その夫ゐ向
軍吾。南宮山行方九相模鬼王九蝶門太郎。同次郎。熊川入乃同十郎を
宗徒の人とーゝ千勢ゐ合一千余騎指促堂村の塞よ於り近郷の地乃
代官を夜討ゆー今浪米穀を掠め奪ひこれを兵粮の料と准備十ふゐ
ちく討をと待よ小栗家枝の勢太住ゐ陣どりねと豫て丹候よ牛ー並く
処の歩卒遅り参ゐて報ぜれば一色をとゞめ横山の眷属うち集て評議

ある時は撲山太郎班を出くとゝもおぼつかなき敵の安危内を知くざるうへおのまゝごその備整ふまじ今夜通寄てこれを討ん雑卵を破るより易からんと言ければ人〳〵此議然るべしと言〳〵既にその準備いかゞ何おぼつかなきといと潟うれど遅くれじと人〳〵おのくも次郎安春が兄吉弥照天の故をとりて怨を懐けばその中平生睦〳〵しく今此評議を聞きて道理至極とそれぞれ兄小功を棄れんことこれを勿と同く席を進ざる太郎屋の宣ふ処その謀あるべくも似ざれども甚危也そを奈何とのれが凡夜討朝駆の常ふけゆくまゝ今回のことは足よ友を味方は千余騎のさえ勢あり敵は僅よ五百余騎と聞く小勢を擒んと勢を討んと此地方を向ふそどのりのいうでもおよそ後の心迫るうえ勇なる兵を悉く催し逆寄せば必ず落よ陥ん大なる彼をとらん初度の軍ふ打負ば味方の穏をはじめ始終の防戦あやうき処只守るべく敵の変と空頼とこれを討ふもろ〳〵と言巧〳〵けまぼ衆これよ惑ひ且小栗が武勇を恐怖まこが遂ふ次郎安春が異ふ随ひ夜討の義勢ことをく。明日討ま寄ふよく防ぐべしとて何の術の備もなくぐゆ運の来なるべり。去ば小栗判官代助重が家扶村房と絢を定め撲山が山塞ふ至りし時既よ二更ふ及びしかば撲山方ふ明日ハ敵の寄るとなれば穏〳〵今夜斗ぜ。酒と飯ぐゐ心よく瞰べしと甲夜より大ひも士卒も酔をそして熟睡されば討ま寄せられど知るりのじ小栗ハ塞中静ふを窺ふ後背の方ハ高く山聳よりも前ハ平地なるを深き堀をほりく掛るが足ごとに踏ぬく城門ふたてこうけ置りこれハ塞中より討ん虫の鉄砲ふ恰好固の城よ天晴ふびん小栗ハ堀際を彼方此方を見廻り池左司を招ひくらゐふ汝平生水練を好くり此堀を越く敵ひの様ハ

渡さでやはあり。されば庄司畏まりて堀際より至り。梯を引くる処を渡れ。
その間五間ばかりもやあらんとこれも堀の水より一丈余も切岸なり。天を
仰ぎうんぬん此方の大樹と彼方の大木と。梢の枝を接へたり庄司これ
ようり。急ぎ彼木に攀上り梢の枝を伝ひ。うんぬん對ひの岸おりさまは只
猿猴が梢を伝ふ如くなり。彼岸に渡る梯をもとゝくるぶ彼岸に何事
あらん。扨も只一人の力をもて容易下りける庄司う力のそど目を経るとぞ。
小栗大きに喜び庄司とそ今夜の一番ぶうれ続けや人々渡せや者どもと下知を
なし。其身も梯を渡せば誰うとこれよ後ぐき我劣らじとうちうれ。
此うちゆも風呂後苑田辺の兄弟ら庄司が比類なき先陣は我こいづくも武
字ううとぞきこ。六人の人々一般に門の扉ゆまとひて曳く声〳〵と押ぐ。
さしも大きやかな門ぶりしが。数の大力六人〳〵て押ぐぬゆとく〳〵とうごた
り。終に貫木おし折く。扉八八字ゆ開ける。この物音は熟酔ぶる筑山
方砲ろ仁醒く慌忙きやよや夜討の入ぶよぅよ太刀よと主強ぐぶ。叫喚地獄
の罪人が呵責よ違ゆも劣ゆん此時弱ぶまろ〳〵家杖打房山上ろり
寨中の光景を窺ひ居しが俄よ立騒ぐこと鬨の沸ぶごとくなれば主小栗
青入りしぞ後見ぶとうそ人こと甚ぶ先よ山を下ぐべきの兵ぶなどろ
躊躇ぺれ一時ゆ寨中ぶうち入く周をどろとぞ揚ぐりけり筑山方こゝぶ又
おどろいう〳〵乱亘我先ゆ逃んとさぐ長途を歩れぬゆるのろゆれう〳〵人
支へぐり小栗が郎党後落ぶ者ぶ渚軍ゆ魁一二の木戸ゆ入んとする賊ぶ
称津今夜又渋草舎名若大勇軍五吾。

間ろへ風間次郎正員横合より責かゝて勢ひ猛ふ今夜丑をこゞ一上絵ま
突伏ぐり。舎弟の軍吾のあ人ぢまでぢ狂ひ救うとするを後前兄弟刀ぢまに
踊りかゝるとえ〳〵ぐ賊将二人抗をなぐ
なんぼく破れ家枚小栗の勢おー入り斬ぢゝぐ討ぢゝりかゝぐぢゝれぐ二の木戸
ぐ二人をぢ下ぢえ打ぢ入山行力九相摸鬼王蛾門兄弟。熊川父子ぢ打ぢみぢん
ぢほ宇徒のり。此ぶよ討ぢ彼ぶふ討ぢ今ぢそぐまぢゝりのもなー。ちぐと
横山安秀と一色詮秀と討ぢゝりのこ。
照天姫突登小ぢ郎片岡兄弟青押を独ー並ーぶ忽ち使をりて云こーぐれバ。
我く塞外ふあって。ぬ引兵を率ふ処ふ雑兵の中ぶ。ぬ引ぐぢれ老兵の仕り。
生捕ぐぢんぐぢふ安秀ぬぢぬ。いぐぢぐぢぐぢひゃぢべぢゃとあぐふ小栗家枚の
枚引斜ぐぢぐ長び枚房ぐぐりぐぢふ照天姫の父北條氏政ぐぐ海会

夏の御免もあれバ。姫の幼ぬ仕ぐぢべ
使ふ分付て還ぐぢふ照天とれをぬて大いぬ喜び則ち横山を率きぬし。
小太郎ふ命じて郷を解しめ容貌を正ぐぢ
今ハ天と共ぬせぢふの讐なれバ畏ぐぢ
あれとぬぢぢれ。青押もまぢ進ぢ出人今ぢぐふ名告ぐんぬ。おこぐぼぐぢふ仕れ
ども。おんぢを仇と怨ぢる。縁故を知ぐぢとぬ甚あぐぼ」を述ぢべる。そもぐ
奴家ぶ父ぬ道ぬとて。ある老公の下僕ぐ。おん身主君公相摸川ぬ失ひうふその
時ぬ法依よ仕り落ぐぬふ底のみぐぐとなるべきを辛ー七脱ま出殿の楼死を
姫君ぬ生ぎまぐぐせーぬ土家亡び。ぬ行先を知ぐよしなく。故郷ぬ還ぐりぐぐの
よーをぬぢえて。何方までぬ在家を尋ぢぬ奴家を售ぐぐ旅用と
なー。相摸の玉よ五王ぐ」ぬ不図おんぐふ捉ぐられ馬の枠よ飼ぢんとなぢー

折ふし小栗公ふえ参なんぞ。公の頸こと委〳〵くやえく没命さうら。こをりて
仇とうち入いらっしゃいませえおそさび参らん。と涙とさりふいきそられてしくび挟山安秀ハ。
最前よりこそさし俯きりのをも云ぐ居さうし。何思ひさん主のかり。側へ曲
居さる雑兵の短刀奪ひ我と赤左りの腹ゐ突立てこゝろと座して照天を対ひ。
射捨てて我拙うえをび恥さうで。小栗公姫〳〵ふる光彼が才猛愛し。
姫をりて許嫁を我仇とおりふ女人を堂さるこの腹さし。これより名武を
小栗を恨ん。為光をび我ま殺し。又ままこ小栗を讒害せう必竟邪なる心
より善人を殺しう。甚深ハ我子の愛さられう悪事をなしたうび経ま
天罪脱ん〳〵く。一時よ子とも又ま殺し。現在姪のまに捉られ。六十年の非を
知て後悔さるま甲斐も己。姫ゞみふ雄なれど。さそゞ伯父の名ゆめで討捨する
ふりやと。彼自殺をびなくにるぞ。さられ我身の元非を悔ひ。ところを善ま翻さ。
せあそのまゝふあるぞさし。いきさまこ首討捨。とらくど照天ま今さふ。公然
善ま改や。叔父ハ父の仇うび〳〵。狙も紛ら得く躊躇ハ安秀声を励ます。
さひ甲斐もなく照天姫そこの我勢ハ涙りもそ世期ま又び臆さる殺こ」ハ
我ふ苦痛さ。このふり殺ふさるふ心。いでさ我ふ〳〵と実ま。力と存ふんこさを。
照天これふ免れ父の仇うてはもせい限こけ」ども
ハ着をひぎ賜給とこゝも長刀りて雄こ〳〵も。後脊ゆさろはこさ久くそれが。
傍ひべ〳〵挟山が首ハ前るぞ。ふけこ。世期ま挟さ〳〵み生ひ免と安ふり一太刀そ。
経さしてとやめれバ豫く。の約を易ゆくやこやこ〳〵照天ふ知ま善挟

横山首級

照天

小栗助重

池庄司

田辺平八郎

一色蔵秀

青柄

喜ひ玉ふ。刀をねひく横山が厳とこそ刺しうけり。此時照夫（孫七郎）うみ置よ添亡父の神主の前へ横山が首を供へ香を焚南無父の霊魂よくめせ手次の仇安秀を今日只今討取るぞまで向ふべし修羅の人と懐着の涙せきもあへず念仏数遍唱ゆるべ昔柳も悔中うり。亡父遺処の神主を出ふるひ祈よ居ゑ安秀どの奴家が力ふ及ひねを。姫君父の名信をほく憐みまふうふくべ今仇をすさーのひね事次の無念ね晴けて速よ成仏遂さしこの人や有ま幽霊堅牢地生菩提と念ごとこそ刺うる刀をとり直し。我とうろまに堅と。ふつはと切れば人くおひくくいろみと鏡るひうう青柳彼おー拭ふ奴おうう月かくふ憂恥こうまべ速よ死をべたなれどもなをれ一つを父の菩提のね。又二ッまん怨家うづふ横山。の人ふ在ひふ雄文宮ね朔ふ

善公ふなりまひことなれば仇ようさんも本まうふ納べ。千鶴吊ひ供ん。とさてこそ貌をふ変るなれと語うを供ふ父を姫をそでふ人くことを憐みまも。此をりも賊塞俄よ火発う。噪くとして燃くれば美登小左衛門をそ。照夫ふ對ふ賊既よ亡ぬねとおぼまべ法ひ大将をどなくぼ凱旋あるべーとぶも統くくさるふ。小栗家枚の友ねるまう勢うり仕ーまりくれば照夫兵児斤ふをおそ出迎へ引率て陣中ふ入ひめ。ありし雅うくを祥ふ述横山う効首勇ふ入まてうべ支将その効を賞ーそほまも。おのが仇一色を脱逃うるを悔る附う。結城招朔一色注秀を郷め此陣中ふ牽まり。小栗ふ遭うくりうふ我ふ仇ふ一色注秀を討ちんと紛ーうれば。前よ注秀が武巻の陣を出奔の舵もその去向を変ーて心在を告ね。今ようこ此所を逃去んともめくんと。蜜ふま勢を引ひ立ち逃ふ生べ地方よ埋伏させふ。

果して忍び居るを終よ捕へてくゝゝゝ素
詮秀を小栗よゝせべ。助重天よゝ地よゝ喜び。是迄
よゝゝ。年比の素懐を遂ぐるゝゝと悦
お房よ對ひくゝゝを申ゝ。結城の好意よゝゝ年ゝの仇
捕ゆるゝゝ。足下も我も恨ハ同じ怨家ゝゝ緒ともにすんとおゝふお房
辞してゝゝゝ。結城の一色を生捕しゝ。是ゝゝ足下のゝゝし我卿も
功なれゝゝ。ゝゝゝとゝゝゝ共よ討べしとのべ。足下一の太刀をなゝ
二の太刀をゝゝゝ。譲ること再三再四及びゝゝゝ。今ハとて助重一太刀を
それべお房二太刀を下して。詮秀を三断とゝなしゝゝ両将ゝ首をゝゝ各
父の霊よゝ向ひ教手の本懐を遂げ感泣の涙ゝせしゝゝ。ゝゝけれべゞや
凱陣して。今日のゝゝ鎌倉屋よゝゝゝ既よ陣をゝ拂ゝとゝ此時夜ゝ
わのくと明るゝゝ。朝霧晴ゝ向ひよ
事なゝべ。人くことゝゝと共ぶうちゝも。小栗
人ゝゝ前よ進を出今日仇を討ことを悦
謝それべ。上人も再び人くの勲功を賞しゝ。さて云ゝゝ急ぎ還熟ゝゝゝ
人各命のりて命よ逆ふ者ハ亡び命ふ
東國よ在て吉ゝ小栗の人くハ渾ゝ東國よ産れと。ゝよ在て吉ゝゝゝ西ゝ
赴ひくゝ幸ゝりゝ。そを奈何とゝゝ。初ゝ相模ゝてゝ夫婦離散せゝと笑ゝゝ
行て再会ゝゝ。再び東よ帰ゝふ及び。助重寿疾を禀照天股肱を失ゝゝ。
我言よ違ひ又西ゝて病平愈しゝゝ婦本懐を遂ゝよ至る西よ居をトゝゝ。
富貴をゝくゝ子孫を保ぜんとて又告知らむべきゝ。ゝゝゝおそと結墓どの。
まご総角の生昔さゝゝゝ谷の記音堂ゝそ稚化の翁よ舎て説給ゝるを。

満蔵公ゐゝめへめび一ゐ一色側よ在くこれを㐂結城の切を奉ゐんと俟を擁公を惑ひ一。小栗と名武とをして記音堂を毀てる冒詩忽ら轍ひ衣家待よこびう。親舅の為を忘ひ谷の記音堂を再建一ゐ孝ゐとこれよるこべうふびと。説㐂されが小栗助幸ゐん教さとゐ宜一。鎌倉殿よゐゝへ上連ゐ再建をべ一。さて又上人前よ示一ゐふ我くが牙西よ在て宜一とあれば此後西國よ赴くべ一。結れども某を初の腹仏乃郎堂悉十人ゐ東国の産なるこゐ屍を東ふおさゐんとん幸うるゐ彼記音堂の下ゐ一大の坑ありとゐゝめり。甚平よ我くが髪の端を切てこれを泊めゐ。東ふの土ゐなほよ均一く且ゐ仏よ因縁を結べゐ。現當二世ともゐ安うくん曾さて某榛山が許よ至りし時。鬼神の馬をりて害せられんとし。かくて是よりく照天沢妻ととるこゐとを得るうり。生後箱根の危難よ鬼神が助よあふびゐ生命全を得るし。馬の死ふ望こそ馬氏記音ふ奈んゐを安産せんこゐ奈何あらんと㐂ゆるゐゐ遊行上人大切ゐふおびそゐ宜そうひなり。さるひ書杵をりて其堂よ居しめ朝暮香華を供へめびゐる宜ゐ非ざや。とゐふ人く上人の恵を感激そゐゐめて吉柳尼と㐂より。助く小栗結城家枚の三切を一名一挟山が首級を携て逼参ゐ逐り。持氏公の実検よそうゐ其切を賞一名因心堂の地を賜けをその中よ小栗助幸ゐ柱行上人の示ゐほとをゐへめび平頼よ換一。こゐめが公の観音堂再建のことを請ゐふ其ゐまゐし四年容のり。小栗ハ甚びて自ら行一ゐ一ゐ三を営し此附助幸を後十一人の墓の末を切く彼坑の中よ納めうり。是前よ説る㐂る此坑の新田義興主従の霊を封じうりしが。堂を毀る時再び世よ出く。小栗を後と生れ出前世の因縁ようって今此坑よ君ほ十一人、

髪を納めなほ不思議なれ形て日あらじて佛堂再建の功なりし縁さ
ひりうけさんなるなれが馬に乗音を安置し。拝行上人を請じ導師とし供養
をなさふ村氏公をもの海人等の拳銭群集し結縁をあつまり。千后さ柳尾
氏七世堂を屋しし仏を仕へさしろ夫より小栗の縁者殿を乞ひ京都や
登り私軍家の元ふ入り一色横山と討しを首とし訴る堂再建のこそ
詳ふやへ上しふ私軍家よも心感あつく丹後国峯山を賜りれい助を添く
給る恩を謝しまし夫婦りろ共ふ郎党を倶し新恩の地さり十人の郎党に分ち
恩沢うちふべ夫婦君ほ道を楽しみ政正しろし行ふ。峯山ほ氏をさらしく。
近郷の国人小栗の徳を慕ひ丹後一国静謐よ治りね甚后小栗照天の
間よ男女の子とも数多生ふいと目出な栄えり。

小栗外傳巻之十五　大尾

寒燈夜話　小栗外傳附録

東都　絳山　述

小栗が事人口ふ膾炙さとらくとも終ことしてさざろなるさび或説ふ云小栗
判官兼氏遠州の人なり蒲野冠者範頼の旗下ふり相州ふおりけほとれ
横山とらの者の女児照手姫とらくるふ通じるれ横山これを悪こ兼氏を招請し。
鬼毒毛と名つけられ悪馬ふ乗しめ喰殺さをくく討しろども兼氏ふ双乃
御者ゆてりの教ともせざふしろ横山のくく憤り毒酒を進めくく兼氏を殺れ
後ふ兼氏蘇生しそ後沢の上人よ乞ひれ熊野本宮の湯よいくく本復し。
相州よ立ち照手姫ふ逐命の横山を討くく本領を安堵さ兼氏遠州天竜川ね
辺ふ小栗の氏を名乗ふりの是妄誕の浮説なり又小栗實記ふ云
書あり　享保二十乙卯年開板ふそよ
浪華人畠山養山と云者編　世よ行ふれど信ひ鎌倉大仏紙漉会仮九代記

南朝記ゟ小栗ゟ系を載ゟ渾少ゟ差あり何ゟ是ゟ拠ゟ常陸國誌ゟ
小栗ゟ系圖あり此ホの書を左ゟ出せり。

○鎌倉大草紙巻之上応永卅年癸卯春の比ゟり常陸國の住人小栗
孫五郎平満重とゟりのありて謀反を起し鎌倉の仕下知を背ゟる間討手ゟ
ゟ退治とゟて動座なゟれ結城の城を責ゟらるゟ小栗勢ゟ軍兵数多城ゟり外へ出
左近将監木戸国重ゟ先ゟの大将とゟて吉見伊勢守ゟ上杉四郎ホの勢ゟ
かゟりて両方ゟり責入ゟ是ゟ終ゟ陣を責落され小栗も行方ゟら
ゟ数宮左馬助掴も小栗ホ同意ゟてもち行ゟ落を陸谷後何ゟ追ゟ討ゟ
け給ゟ此井ホ野守佐ゟ未近江入道も皆ホゟ一味の由ゟて同八月八日ホ討取れ八月
十六日結城ゟり武州府中へ仮陣ゟる。中略今度小栗忍びゟく三州へ落行ゟり
其ゟ小次郎ゟひそゟホ忍びて関東ゟ
ゟれを其ゟゟの強盗ゟも集ゟりゟほ所ゟ宿を借ゟゟ主のゟゟゟ此辛人ゟ
常州有徒仁の福者のゟゟを見定めて随身の宝あゟべ。打殺ゟて取べゟ武
渋合ゟと云ふゟゟ徒ゟる家人ともあり出行せんとゟふ一人の盗賊ゟゟ酒ゟ毒ゟて入
呑せ殺せとゟふ方ゟと同ゟ宿ゟくの狂女ども集め今夜ゟど泊ゟせ。ゟり戯ゟ彼
小栗を絶ゟの郷ホりて色酒をとゟめゟれ其夜敵ホゟもゟれてゟ姫ゟと云ふ
遊女此ゟる小栗ゟあひゟゟ此有さゟゟをゟとゟ」知ゟりゟや。みほゟくも此酒を呑ゟ
ゟく有ゟほゟ小栗をあゟれを此ゟゟをさゟゟ
さゟふ呑ざゟゟて家人共ゟ皆何ゟても酔伏てゟり。小栗ゟ仮ゟあゟ
ゟる女ゟゟて林の有ゟゟ生ゟくゟれゟ林の内ゟ馬ゟ毛ゟる馬を数ゟて垂ゟり
此馬ゟ盗人ども海道中ゟ出大名往来の馬を盗ゟりゟれども皆一のゟゟ馬

ゐる人とも馬食賜れバ盗人ども不叶して林の内さして逃置たり。小栗是を見て
又ハ本の主成り。財宝おく〳〵取持ち彼馬を無数とをの〳〵落行を小栗を
乗双の馬ニそ乗たる。片付の為ふ萱沢の道場へ馳行上人を頼こゝろれバ。上人憐み
時雨二人射さ三州へ送とゞれ。彼毒酒を呑々ゝ家人并ニ女かく〳〵酔伏るを
河水へ流し沈め財宝と尋ゑり。小栗をも乗ひけるともなり盗人どもハ
そのよ夜分敵を敗よともとゞれ程女い酔る。ハゆりてハ伏るれども原来源氏
呑まりけるゆへ水ハ流れ行川下うら這あがり助りたり其後永享のこゝ小栗
三州より尋ゑて彼遊女をうづ縛牢へ入。稲のたゝりを知へ盗人どもを乗給ひ。
みな誅伐しより其孫へ代と三州ハ治る。

（鎌倉管領九代記巻之四ニ見ゆ）

同此年五月九日小栗孫次郎満重退治のこゝあ。左馬助村氏三千五百余騎
を率して下総国結城へ発向しのふ去年八月ハ小栗満重所領のこゝふ
分て左馬助ふこゝろみを含み。家人若党をうつれく不残ハ通り結城の
城をゑこ立籠ゐて。この要害を堅くし軍勢をまもれる。近郷まで不残陣れる
ゝ。岩松治部大輔が残党その外上総下野の一揆衆ハこゝへお詰あつまり。
五六百人ゝ及へり。お氏太刀死ハ憤りふかく笈領憲実の全軍ハ上杉三郎手方ハ一千
余騎ニて押寄ゝ向られゝ。寄手をハさて城ちかくおしつけ陣を取ゝる処ニ城の兵
追ちらさんとそうりて。三百余人木戸をひらきて打て出るを高崎大炊助ゝ
軍勢二百五十騎迎合てたゝかひ城兵散ゝゝ掛ゝれ後なる城へしき
ゐりぞく寄手ハよく勝よしまてもおしかけ〳〵ゑこと城中ハ残ゝ
ゐどもハ同時ハ打ゝ出て矢狭をもしまず散ゝゝ射る。寄手百余人いこゝ死負
ハ打れてをみうまの荒ハを入ゝゝ責かゝるゝ。皆城中へそ引入ゐゝれ

寄せ悲く逆茂木の際まで結うけ掻楯うたて居ふう城兵ハ退篭られく首をバ出さぐしとも要害きびしく城なれバ寄せ打入べきもなく歯ぎしして攻掛を憤り矢軍して日を送る城中これを幸と屈して穴を掘りて籠り乱れこゝろ〳〵然の間のそなゆ似ふう。木戸を堅めて旧井五郎しひなほのうち寄せの結うけて物喰ふよいさ一夜打〳〵肝をぶせんとて志同じき輩をいざそのひ廿七人ある夜西風をたび〳〵陣屋より火をさし関ぶにくしうがさとそや城中より打て出ふとて走の手勢だ立上を下ゝ返一馬この物の具よとひしめく火の子雨散く陣屋〳〵や焼つゝとびき風吹来れバ煙よもせび火よ惑ひ打消さんとし防ぐとまれ行よ。敵の夥少をもそらび味方の軍兵をも弁へざるを歎と〳〵同士討をぞいとふ旧井五郎もさそろ小勢ゝさのうや添ハて跡を立切ふを

とて陣屋ゝ積置ふる兵粮おこゝへ入のよそ落ゆいこと不覚く。そゞろ城へぜ入のよそ落ゆいこと不覚く責口さそろび陣屋をきびしくかまへく用心をぞいとける況ふく敵を割ぬ様をするふと笑ふね人かなふりけで。左る旧井五郎もふくぬ千法ゝ呉〳〵ね寄合武者の古ふく不覚なる物ゝ射打総ゝ七騎成ゝ門〳〵小栗ゝ同ご一桃井下野入道佐〳〵木陽成入道ゝも一味与力ともゝこれらハ後詰衆ゝこゝ。ゝしてハ大るたゞ持氏ゝゝゝ向ひ一廻ゝ責亡ふうんとて鬨会を打ゝ結陣の城よりこと〳〵にく同射ゝ陣屋を攻り。猶つゞてせめ上ふ。陣ゝ驒守ゝ駅〳〵くんとする処を。陣兵矢種を惜ゝと散〳〵ゝ射出ー大木五六十を切〳〵落ーられバあの手ゝ先陣完戸又四郎ふ五百余騎痛手負〳〵引ゝ城中二百餘人木戸を固て実て出〳〵四角八方ゝ追まくりぬ。ゝ村ふくぬ旦て大将左る旧屋の内ゝ猶ゝゝ

なぐれども味方八百余騎四百余騎と入替り。二百餘人を中まつみよせ、さんざんに戦ふ
城兵残りすくなつみ討とて東がさして落ゆく。寄手もこれを日も暮つと木戸と
引ざま!に逆茂木をうち倒して込うけしかば城兵火よはほどし防ぐべくもなく我先にと落失
それが大将小栗孫次郎を家の子竹之恵子息小次郎を討とて塚をぞ
つぐ。その暇うに切ふく煙の中より臥まろびて要を摑く虫を。
南朝記 前二書と大同小異のまゝ。下畧

應永二十九年。常陸國人小栗孫五郎平満重お氏の命をそむき居故
持氏上杉三郎を方小山左馬介ふ命をうけ攻ふ城ふ攻
ふ合戦を同三十年五月九日落倉の持氏小栗退治とふく下総国結城の
塚よいう。同年八月二日小栗落塚にて。満重及び宇都宮持綱うちとりて
落ゆきしを塩谷發向する退けうちとりてあり

○鎌倉志ふ大草紙を引ふ小栗がことを云へり世人の知る処ふ。

相州荏沢駅の遊行寺の院中長生院とふよ小栗并家人の墓あり。その院
ふ小栗墓縁記を生を前書とふ実なりと雖増墓ふ虫を縁記なれば敢て杜撰
ゆもあらまほしれ。左よ出ふく参考の一助とを因よ遊行寺の圖説をも出ふね。

藤澤山無量光院清浄光寺 時宗本山

本尊阿弥陀佛 座像長四尺慈覚大師の作 眼裡開祖一遍上人身四代目
吾海上人の像を安置を

觀音堂 本堂の左よあり。正記音を安置を。長を尺五寸智證大師の作
當山四十二世南門大僧正。西国三十三所の土を以ふ本ふれ下ふ埋て巡礼の代よを。

常行堂 本堂の側よあり

鐘堂 南の門内よあり

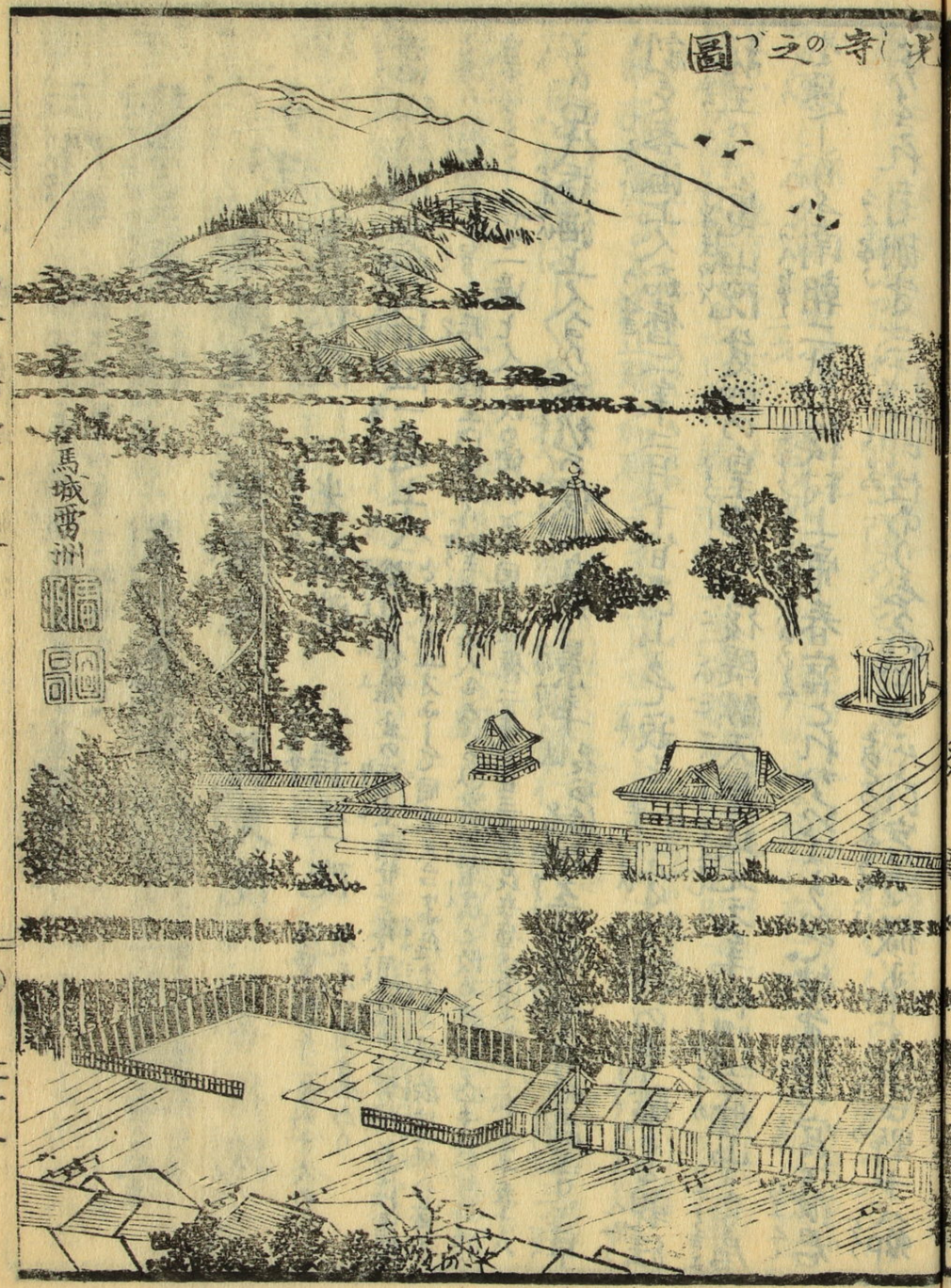
日供堂 本堂の側ふあり

經藏 記ふ堂の側よあり

方丈 日供堂の側よあり

富士見亭 方丈の上方よあり 額あり清音と書を

藤澤山無量光院清浄寺之圖

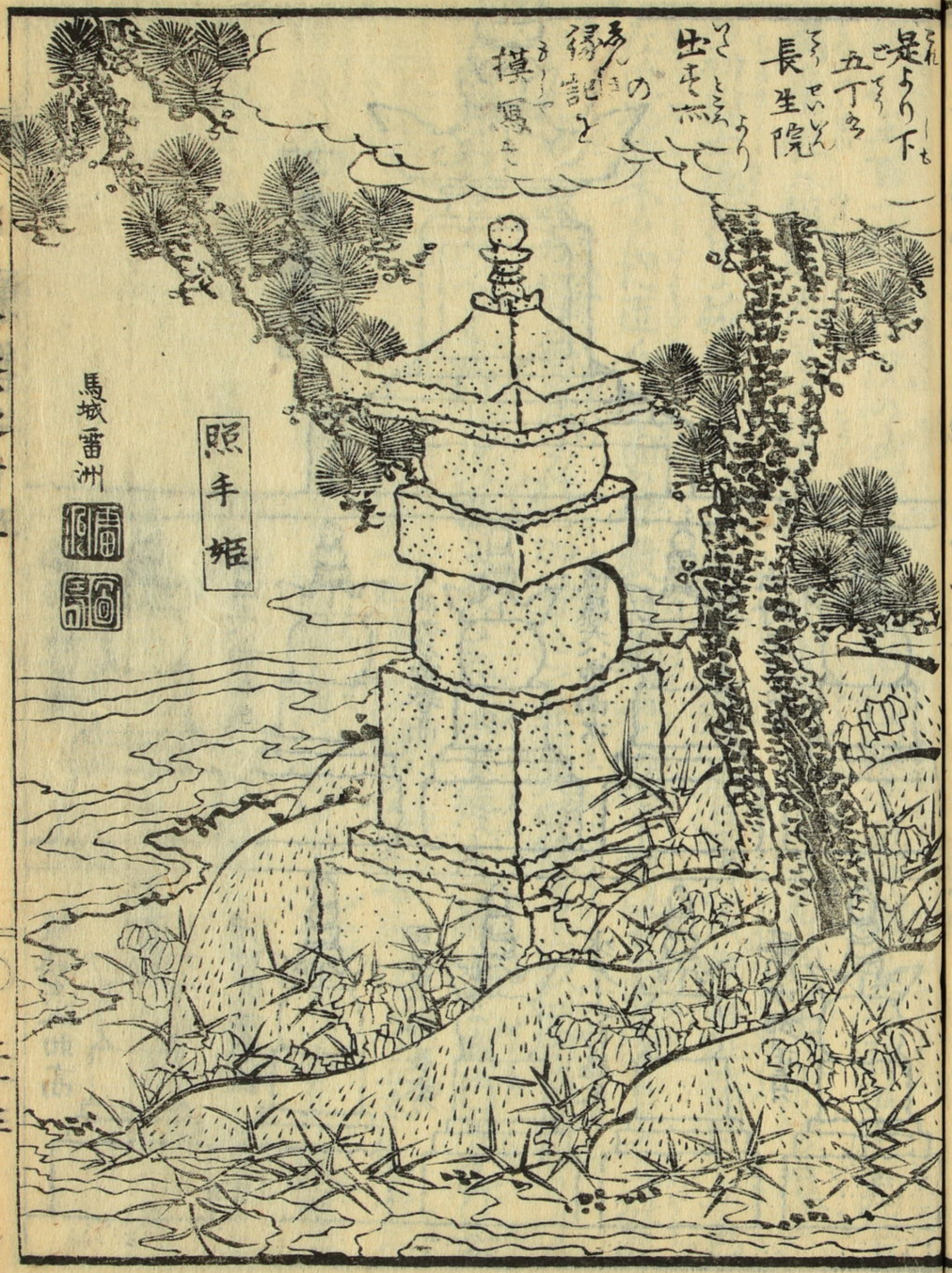


藤澤山無量光院清浄寺

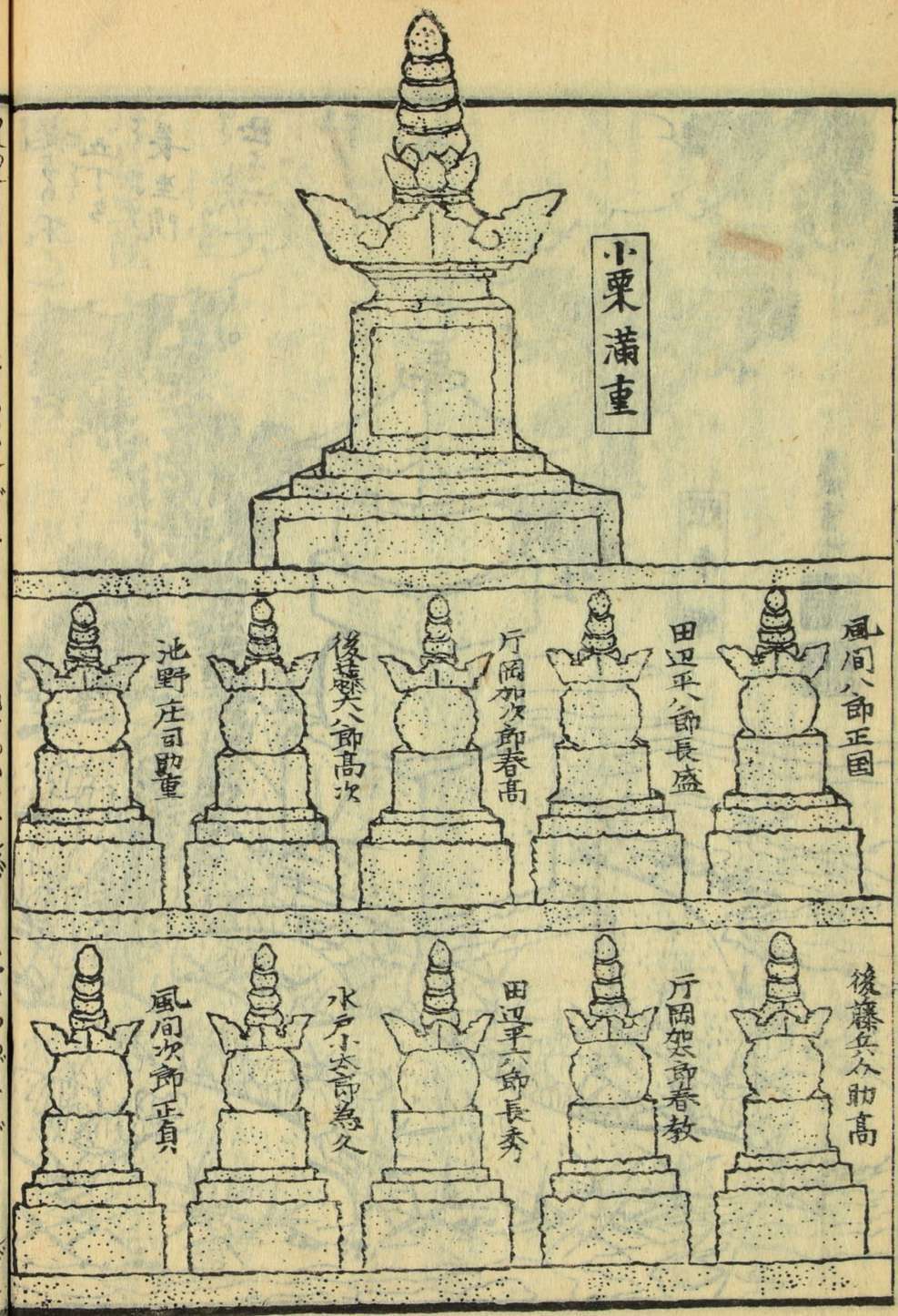
三門額　森沢山と号す勅額従二位菅原基時卿筆。
裏書　貞享四年丁卯仲冬之日。
北条家墓　南門の内　當山累世墓　開基住行上人より五十三世までの墳墓あり。　森沢山三十三世までの墳墓あり。

一ノ院　真浄院　栖徳院　當山
子院　貞松院　光岳院　長生院　小栗照千丸外十人の
　　　

皇子ゟ御よろこび順國のゟ多用なふぶ。
なく。賄賂食物をそなへ慇懃をつくせども上旨宣領職斯波九郎つ佐殿ゟ
ゟ渡人へ仰出さる。又足利宮代お軍義お
教主を賜ふ。それより代〻の三方家ゟ
○小栗堂
道場ゟ東ゟ町ゟあり。子院の中ゟて長生院とゟの小栗満ゟ像
三十八才地蔵ゟ尊ゟの作。ゟゟ照姫の守佛とゟふ。閻魔王の像小野篁王の
作。又傍ゟ小栗拾人の侍臣の古墳あり。
○什宝　鬼鹿毛書　崇寧通宝古銭　照姫所　天狗爪　古鏡一面
此長生院ゟ鬼鹿毛馬の図古境の図小栗縁記を出せり。此縁記の文字
疑ゟれるゆへと私の杜撰ゟ正ゟからく。其侭ゟ写して左ゟ出しね。



是ゟり下
五丁ゟ
長生院
出ゟ
の
縁記を
摸写ゟ



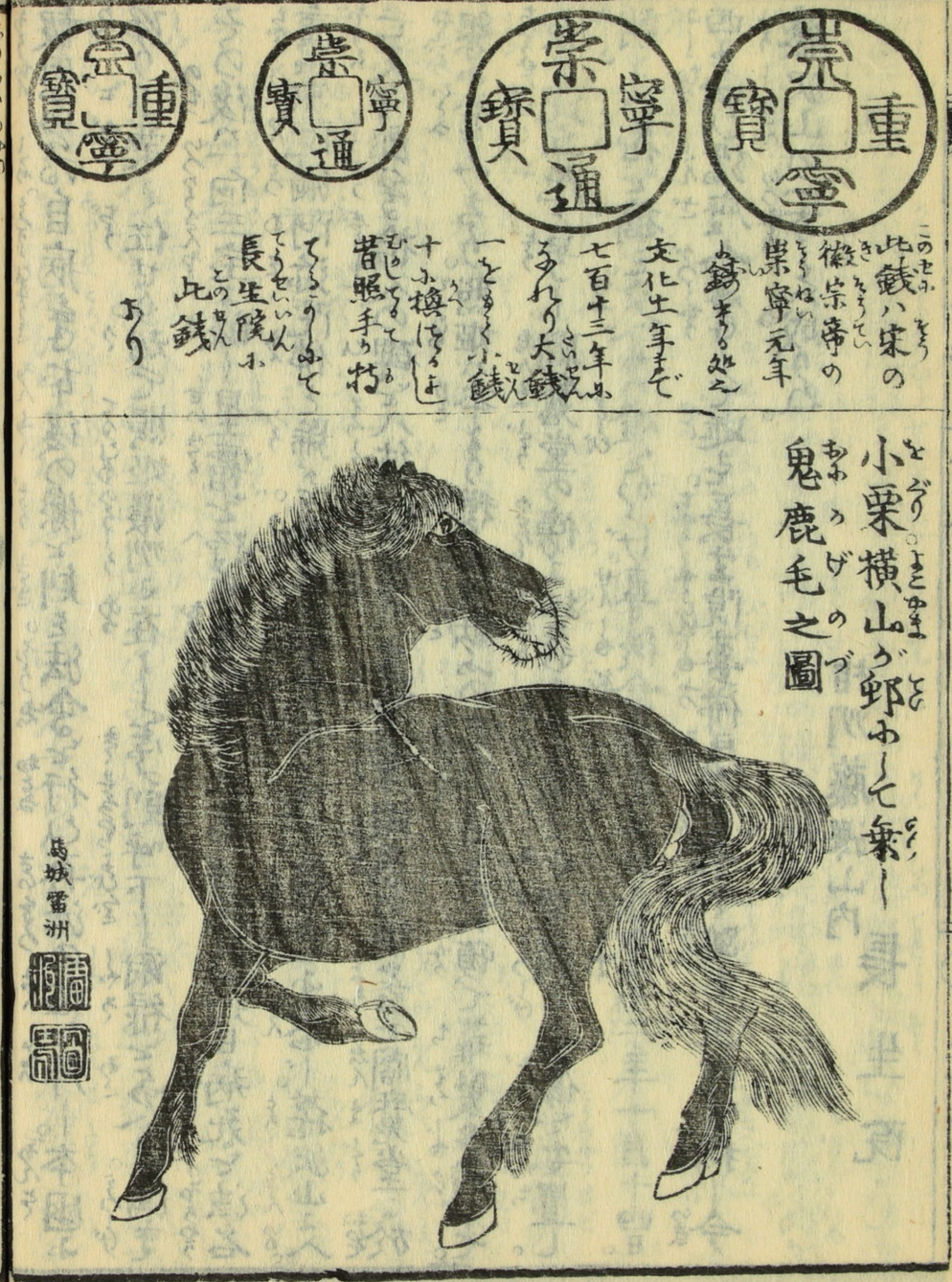
植仁王百一代小松院の御宇。[illegible]
滿重性ハ植武天皇の後胤にして武ハ属一智勇兼備の士[illegible]の初同士逸言ヨリ依て謀叛の[illegible]
左近衛監未戸内近仗駐向ひ[illegible]
勇を揮ふ[illegible]
いふ労戦[illegible]
三河國ヨリ落行く[illegible]
神詣の[illegible]
志て洛人を掠め山城を業とし栄曜よ[illegible]
いふ妓女あり[illegible]
設一子ヲ父母亡て後故あり[illegible]

よろて階老の拒云を結びしとも。幼子月日も立ぬ頃。大徐の伯父ども判官を幕下に附んと刁奸の人を撰び将く謀るとも。満重生得智恵あるかしこく。其比大脇一疋の悪馬在られ。大ひに人を喰ふ由を。鬼鹿毛と名づけて後園の樹下に繋ぎ置ける。満重勇猛まして従ふざるを。彼馬を害せんと。満重を誘ひ出し。糸竹歌舞の興を催ほし。小栗を模山へ従ひ連れ行き。酒宴おこたりなく五辛痛傷して忽ち気を失ひ倒れ伏す。小栗ひまうとべれ悉く酔死せり。模山へ従大ひに歓喜し。恐ふる我妻子を奪ひ取んと。上野が尓お捨よける。干時萩沢上人其歎の夏や青夜の官人まりて曰我が

閻王の使ぞと一ツの出札を上人へ呈せ其書を披きこんとふ。大日本常陸国小栗満重士拾人へ宿世の酬因ぞ満重獨り報業ふかふ依て猛札を付其文曰此病人送熊野本宮湯若右人暫助引之者可勝供養於薬生せむとや。熊野の温泉お浴せば速に平復ぞべしとの趣なり。父兵衛の尉そうしを見。子等彼所へい[子]テこれ通ぞと云へど不肯。吾父ぞ拾人の屍を葬り。満重を扶ると乍ら車を造り乗猛札を付其文曰此病人送熊野本宮湯若右人暫助引之者可勝供養於僧功徳実まり地名を車田引路と云ふ此車結構本宮湯の客まあり入湯の間に製ぞ栗ふて結びおこしぞ。本復あらて其を車塚の下へ捨られつべれまり稲荷ぞて小栗判官不時の稲と云ひり。父母照姫ぞ常と覩じ世と遁んと。窃ふ遥家を逃去り。武州令沢ぞ浦ふ赴ふ追手の者ふりぞ逃ること能ず呵嘖ふ夜類を剥とりて。伝女が淵よ投入れて去りぬ姫類りぬ訛音を念ぞるふ

不思議なる哉六浦川村千光寺の観音堂に此る像を照らの姫なりと云ふ　其比村長が娘又家なりの幸ふるとも宅も流し死しぬ　妻嫉妬深く姫の美女なるを憎み松枝を集め焚殺んと欲を姫一心に観音を念じ祈る　忽ち風起て煙捲き姫が身を除く　これ偏に大士の霊験と云も愚し妻怒り狂ふ所の松枝を江中へ投る　回流激しの者も漂ふ　根を生じて繁茂せり　今俗に姫の宿松と呼ぶ　後に渡辺大破加の宿まで人のなくなりぬ　下り所縁を求て京都へ訴る　奇有のことゆゑ依て官より任せられ本領を安堵す　常州より頼朝公照氏を召れ先妻酒宮に生ける女を満室あれば驚愕る　悔愛る事一方ならず　満室も既に逃去んとするを留め従ふ早く類賊まで捕縛す　利一然而後沢山へ入寺のなれ上人の慈恩を謝し　閻魔堂において報恩のため自病まず本復の像を刻し法会を行ひ再活の徳を拝し　奉圖ふ　久保小栗を任せり　形て照姫濃州に在ます事の則呼下し謝禄を多く満室重ね　その後一向三宝を敬ひ星霜を経て鷹永三十二年壬三月十六日病死を法名　重巌院満阿弥陀佛と号し　舎兄助重領を継ぐ　鎌倉ふ参じ　孫沢山へ入　亡父并郎等拾人の碑を八徳池の辺りふ建追孝謝恩の供養を閻魔堂ふ於　親ふ営みまつる　照姫ハ本より穢土を厭ふの志深くうれい頓て薙髪受戒して　長生比丘尼と号し　閻魔堂の傍より地蔵の像と小栗満室の像を安置し　朝夕ふ灯をかゝげ専ら念仏怠らざる永享十二年十月十四日　西ふ向ひ端座合掌して逝去長生院と称し今藤沢山の一方とハ成りぬ

相州藤澤山内　長生院



小栗横山が邸にて乗ー
鬼鹿毛之圖

常陸國志云小栗氏地在真壁初国人相傳小栗判官兼
家宅也按小栗氏是重成歟説見左児女子所傳小栗
説經書曰小栗判官兼家常陸国人也聞相模國人横
山氏有美女名曰照手國色有文遠寄書以挑女喜而
許配兼家直趣横山家乞為婚横山悪其強暴鴆殺之
兼家死入冥府見閻羅王王察其無罪放還兼家蘇生
云荒唐可笑考旧記小栗氏世系東鑑湘山星移集
陸國大椽多氣繁幹第四男曰重義食邑真壁郡小栗
地為小栗氏重義子曰重成號十郎並仕源頼朝治承
四年源頼朝討佐竹飯路趣重成宅重成饗頼朝壽永

相恐擅狄（ママ）
金撃當作金華髻
南廷百の三字脱ス

九年。信太義廣有自立之志。誘引諸国武士。常陸国武士多属義廣。重成孤立不服而頼朝遣結城小山徒攻之。重成有戦功。三年頼朝遣二舅滅木曽義仲於京師。攻平宗盛於南海西海。東重成皆有戦功。文治五年頼朝自将伐奥州。重成先登。泰衡敗北。頼朝入平泉舘。是即泰衡宅也。舘屋罹災為焦土。唯有一庫存。頼朝遣葛西清重小栗重成開庫点検有水沈紫[甲]厨司藏牛犀角象牙笛水牛角紐瑠璃笏。金舄。王幡。金髪蜀江錦帷金鶴銀瑠璃燈篭南廷百錦繍綾羅等種々珍宝。頼朝以錦帷牙笛賜清重。以玉幡華髻賜重成。為潤色氏寺。而

乞此二物云。建久四年五月。與伊佐為宗。受頼朝旨。修造鹿島神社。經歳月功不就。頼朝怒命八田知家役功。七月發狂疾。自称神託。多吐讒言。初重成以玉幡金華髻為氏寺飾。自後毎夜夢有山臥僧數輩來褒重成枕頭。乞玉幡重成心甚悪之。終發狂疾。重成從者馳取告梶原景時。景時入告頼朝。頼朝命馬場資幹代重成監修造畢。重成子曰重信號二郎。建仁三年北条義時矯宗朝命。撃殺畠山重保於鶴岡麓。重信先登覚元五年夏北条時頼滅三浦泰村。常陸国武士関政泰救三浦氏不克自死於法華堂。時頼命重信襲関政泰宅。闔氏家臣

與重信戰関氏敗走重信縱火焚関氏舘重信子曰朝重號弥二郎朝重後食邑於小栗地應永年中足利滿隆逐持氏小栗氏為滿隆黨及持氏就位常州小栗氏族皆戰死遂絶後嗣云

右小栗ヶ傳を処の他小栗ヶ傳を誌せるの東鑑湘山星移集源公手中行事記ホの書ありて大同小異ゆゑ此ホも記せるもくだくだしきを以て是を漏しぬ其他の書小栗ヶ傳を載せるのありや否世俗云傳ふる小栗判官ゲうの出せる諸本の説を混じ合して云々ならん。

小栗外傳附錄畢

軍書小説類藏板目録　大坂心齋橋通南久寶寺町

源平盛衰記　片假名　廿五冊　伊丹屋善兵衛

殘太平記　同　十二冊

駿臺雜話　平かな　五冊

後太平記　片假名　廿五冊

四國軍記　同　十二冊　一名土佐軍記

續武將感狀記　同　十冊

楠正行戰功圖會　平かな　十一冊

聖徳太子傳圖會　平かな　六冊

太田道灌雄飛録　六冊

畫本西遊全傳　四十冊

繪本玉藻譚　五冊

同白狐傳　十冊　一名葛の葉物語

左清門大夫太田持資入道を深く忠義に感じて弱冠の頃より其家に出入して其政鄉の後胤なる文武の英才を慕ひ一世の戰功忠義を委しく記せる

復讐言出石見英雄録 全部 五十冊
此書三編まで八作者各譬もう四編以下廿九冊
八一家の手筆にて記せり岩見氏をもて通編
若狭の主人公とそなへ剣論して鈴木肇の五像と
称せる勇士の他ごとく作りて由良嶽の賊徒孫治夫
楯立の復讐を木瀬ふ作者の新案を賛美せり其
七編ハ結句にて餘言の一巻あり八冊をもて一部とす

刀筆青砥碑 八冊
此書水戯語ハ採事子の原稿を曲亭翁の
筆削せしそ孫をふの孤ハ実一人名を劇称法
て愛妻於保を殺し狂も奸夫偽二郎を賺うて
盗賊と謀らひて殺さんとせしを青砥藤綱が
明断各その罪を照して懲せる僅話妙案ともべし

蚕本室の八雲 八冊
下野国生岡城主生駒の家臣平四郎国範
が忠心遠慮の新平左衛門が妖獣妖婦を殺
が忠孝よ面白くもめでたし

絵本金花談 十二冊
世係のひとりて作る安珍の安奈と萬寿がそれぞれ
ねんごろ作まで絵紙をり

同 霊鏡談 十二冊

同二嶋英雄記 十冊

同彦山霊験記 十冊

同亀山話 十冊

同合邦辻 十冊

同浅艸霊験記 十冊

鎌倉年代圖會 五冊
執権鎌倉の創業より宗尊親王の下向
まで並て将軍家五代の間の時事を委
くしるせり

鎌倉大樹家譜 五冊
宗尊親王鎌倉ふ着降より累世執権
悪の為に廃北條が一門亡びて後醍醐帝天下を
平定ーまでをしるす

武藏坊辨慶異傳 十冊
雄豊中が水滸伝の面目を摸て変化
敵向ふれば甚奥ある小説なり

大内多々羅軍記 六冊
大内義隆の驍将陶尾張守晴賢
安芸の浪人服部を罪ふ隠れを妻を君と進
復讐 檀之二葉 三冊

同金毘羅神霊記 十冊

同顕勇録 十冊

同孝感傳 十冊

同誠忠傳 十冊

同奇縁傳 十冊

同忠孝美善録 十冊

同伊賀越孝勇傳 七冊

むらの妖婦生駒の方がう瀾屋張る瞰臭が
大悪逆みど正史に出入せる面白記稗史あり

近江縣物語　五冊

花山院の御代ある頃扳上梅九が全傳うく
盗賊為系保輔爵昭おお残暴ご橘安世が
安国生が奥操安世が鍔常人が邪慾膓痛のの
梅九そうご教光船ほ謂ーてのう賊徒征伐
の大将軍為系保昌を助りて賊を平らげ給ふ
近江掾ふ進み生の父母ふ逢ーて依話うてその
父の妙ある事聞ーて知るべー

昔語松虫墳　六冊

建武の次浮阿給ふの妻の勇士野田太郎清秀氏宴
ら武勇味挂子がう継母桃が奸淫安井隼太が陥
悪妻田勝美義里がう聖田の家居水沼源八が妻
松女が枉死木沼源太郎ふ非峰の遊女梅木が孝心
松虫墳経塚みどの由来をあらす

北野霊験　二葉ノ梅　六冊

賊某の妾娥池上七九郎が寛悪のう孝子
菊女と上田某二郎が復讐の小説ーて悪少
年岩見三之亜蔵候の老人無教訴がうみど
を綴うるのせり

報恩珠話　十かえり草　六冊

建久年中ふや出羽の山縣の郷士常盤井内記泰
景則ご二男雛二郎美人の仙郷ご誘れて教ご受
け後年諸矛を助けて父の仇を山伏山ふ討ちて
仙女去来見と昇天せる奇詩を奇ぞとあべー

今昔二牧総艸紙　六冊

天文の頃うこふ播磨國三木の城主別所長宗の家臣
菴崎兵吉夫妻ふ女子ありご兄弟年磯山龍松ごの
遠原勇義がう舷松三郎左衛門が奸悪まで高
村の俳優おが義気ふどいり絵ふ詰ふて與あり

新田神霊　忠孝貞婦傳　六冊

大庭伊織信澄八股田股右衛門ご姦計ふ中ら
て自害ー妻の里ふとお隷ふ害田罰助ご貞烈
忠勇ふて寃を雪死ー家断あり

矢口續話　復讐二十丈松　七冊

近江の士松井逸蔵源人篠村大義ふ感被
れそ茅両人多年寃家を窺ひ青柳佐市
ふ友くもふ阿波の篠村ふて志ふ遂ー傳ふ

忠孝人龍傳　五冊

補家外傳　弥生佐久羅　六冊

補家の良臣恩地左近が女児弥生ふる佐倉源八
佐倉兵庫が狂死ふ子源二郎が眼勇敢寺の
奴を除ひ又沈田の里ふる福屋ご女児向雪ふの奇
遇松平軍ふが騙術秋山大脳ご謀反ふ露
童丸が滅亡源八渡のう話をのべう

骨董新誌　花標因縁車　五冊

小雛半ふ湧ふふ小金ふ彦麿を得
て迷い煩悩の常念法師が尼下の説ふ因縁と
怪くもふ

玉擇頭　五冊

三光の擲のう玉ふしふる話誌ーて上野の國
高井土の呉服屋十ふ湧寃あの裏ふ再興せん
と上方ふ出て百方ふ挣死後ー三百弱両の金
を携乍帰る路楫針山ふて強盗ふ逢四苦八苦

繍像稚児合戦

南海 玉藻主人 編輯

浪花 夢歌川芳梅 画

○初編 東都 玉藻主人 著 二編 同 湯子嗣著 第四輯以下作者一家

永禄天正の頃筑紫名鳴の三男士岩見重太郎橘種季が生立より武者修行の一冊の武功大蛇の害を除き悪鯉の妖を誅め後ち天の授ける所の虎徹成就八川ホ三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し終ホ宝町殿へ奉仕て任官し給ふ迄ホ玉水正ホ敵撃れるを聞ホ言整墓の五輯より益入佳境新話多し

浪花叢書

浪花 心齋橋北エ入 前川善兵衛藏

南部をぐりの敵討 小栗忠孝記 五冊

奥州南部の士竹内新吾門藩の新参の士小栗毛平を猜み窃ホ人をして射殺させしホ小栗が僕五助終ホ主の為に仇をさぐり得ざる阿波女ホ郎き主の妻子ホ告知らせて小栗百二郎ホ悉く父の仇を討せし事実あり

長崎聞見録 五冊

理齋随筆 六冊

和漢の雑事何れと無く載られれば世ホ裨益鮮ホ

うれし千辛万苦の心労を書綴の大井宿ホる飯盛阿婦ホへる女婦みて計て攘ホ金ホ換ホ急難を免ホ事実面白し

金屋金五郎全傳 五冊

浄花堰江の市人金五郎が風情あって義侠ある南波額ホ二ホ情実ホ膳ホもぺ陸ホ半肘洞左陽門が癖性の可ホ笑き浅ホ本清庵ホ陸ホと集て郷人ホ為の一小説あり

輪廻物語 五冊

安倍仲麻呂吉備大臣ホ唐ホ渡唐ホ安名ホ萬葉ホ晴明唐海ホ事ホ悉ホ俗境の外ホ誤ホ述ホ結文ホ浮屠陰陽両ホ術ホ説ホ附会ホ小説荒唐ホ架空の結構ホ和漢の史外ホ一奇話ホ

風流茶人氣質 五冊